第２回地域生活移行推進民間提案事業評価委員会の結果（概要）

日時　令和６年３月８日（金）9：00～12：00
場所　神奈川県庁東庁舎B11会議室、B12会議室

議題１　会議の公開、非公開について

議題のうち、提案法人によるプレゼンテーション及び質疑応答については公開とし、提案事業の評価等については非公開と決定。

議題２　令和６年度地域生活移行推進民間提案事業の評価について

(1)　提案法人によるプレゼンテーション

社会福祉法人唐池学園（以下「唐池学園」）から、提案事業についてプレゼンテーションを実施。

【質疑応答】

（内藤委員）
まず唐池学園や事業所の場所はどのあたりにあるのか。

（唐池学園）
唐池学園は綾瀬市ですが、海老名市寄りにある。グループホームについては綾瀬市にもあれば、海老名市にもある。

（黒須副委員長）
今回の発案は、関係機関とのネットワークも大事だが、実際にもうちょっと施設から出てみることの大切さを裏付けるためのプロジェクトだと感じた。人手とお金がなければ、現場では日々の支援のところで手一杯で、外に出て行きたくてもそれだけのマンパワーもないという現状で、こうした取組みが外に出ていくきっかけになっていく。
また、重度の方がグループホームなどを体験することも大事だが、同時にやっぱりグループホーム側でその方を受け入れる支援の仕組みができていないと、移行は体験だけでは難しいと思うが、そのあたりの考えはあるか。

（唐池学園）
私たちは、24時間ケアに近い方、いろんな重度の方の地域生活の支援や、自立生活の支援をしている。グループホームにも様々な種類があり、運営主体によって特徴があるが、グループホームはそこを拠点に訪問看護などの障害福祉以外のサービスを導入することが可能となっている。グループホームの中で、訪問医療を利用している人たちもいらっしゃるし、いろんな形

の人がいらっしゃる。そういう人が安心して暮らせるように障害福祉サービスだけではなく、地域の他のサービスを利用して生活を支える仕組みを作っていこうという実践をしている。

今後も入所施設はおそらく残ると考えていて、そこが地域生活支援の拠点といった機能に転換していくようなことも必要で、そういう実践をどんどんしていくことや、支援の仕組みを作っていくということを考えている。

今回のグループホームでの体験でも、自費利用みたいになるかもしれないが、そういう発想で地域の訪問事業所や訪問看護などの協力を得ながら、やってみたいと考えている。

（冨田委員）

一人暮らしをするには練習が必要です。私も一人暮らしを始めてもう20年になるが最初は練習をした。そのおかげで今とても役に立っている。

これからは、一人暮らしをやれる方は練習した方がいい。

（唐池学園）

入所施設にいて、そこからグループホームに移り、グループホームからサテライトに移る。そして一人暮らしをして、そしてその様子を知っている私たちが自立生活援助で、1週間に１度訪問して、ゴミ出しとか、町内の人との付き合いとか自転車置き場のトラブルをどうするとか、そういう支援もやってきた。

皆さんおっしゃるように、なんといっても自由が一番いい。グループホームも集団生活ではあるし、施設に入所すると自由度はさらに低い。

一人暮らしは、全てが自由なのでちょっとリスクがあっても、本人としては自由だから嬉しいことだと思っているということを支援の中で実感している。

（在原委員長）

基本的にまず体験してみることをきっかけとして、職員さんも、ご本人さんも色々なことに気づいたりして、次の展開につなげていくというところが非常に重要だと思うので、大事な形だなと思って聞かせていただいた。

その上で１つ確認だが、入所施設会議と受入れネット会議は、まず事務局がいろいろ呼びかけて仲間を増やしていくということだと思うが、受入れ先は入所施設がある法人の中でということではなく、法人を越えて取り組んでいくということでよいか。

（唐池学園）

同じ法人の中で、入所からグループホームにという考えではなく、法人を越えて事業に参加してもらい、ご本人が体験したいところで生活していただくことがいいと考えている。

（在原委員長）
　グループホームの体験利用について、法人を越えたことを取組みとしてやっていき、例えばその先に実際にグループホームに移った場合、グループホームでの生活で何かあったときに入所施設の動きとか、そういうところは想定しているのか。

（唐池学園）
　自立生活援助などを通して、一人暮らしなどのフォローをしている事例がある。
いざとなったら入所施設の静養室を使って、すぐ短期入所で対応するなどの事例もある。そういう機能を入所施設が発揮することで、安心になるのかなと考えている。
　入所施設は、入所だけで運営していく時代はもう去っているという考えなので、そこを模索していきたい。

（在原委員長）
　入所施設のバックアップや、入所だけでなくいろいろとつながりの中でバックアップができるように準備をしていくことがご家族の不安解消につながる重要なポイントだと感じた。

（冨田委員）
　地域での生活というと、まずグループホームとなるが、もったいないと思う。
　グループホームに限らず一人暮らしも視野に入れてもらいたい。

（唐池学園）
　地域の生活支援サービスの人たちのネットワークを作らないといけない。そうなるといろんなところでやるのは難しい。やっぱり地域で取り組んでいるところでないとできなくなる。しかし、そういうモデルは作れるだろうなと考えている。

　社会福祉法人宝安寺社会事業部（以下「宝安寺社会事業部」）から、提案事業についてプレゼンテーションを実施。

【質疑応答】
（在原委員長）
　今年度の実績としては、グループホームの連絡会の立ち上げも目前まで来ているというところ。入所施設の方ではもともとこの４施設の繋がりがあったのかもしれないが、情報交換などミーティングをしながら取り組んでいただき、地域移行の目標を掲げているのが５名、その他にも目標まではいっていないけど可能性としてこれから地域移行へと進めるのではないかという方がまだいるという話をしていただいた。

また、若い方を入所施設に積極的に受け入れて、そこで生活力を高めたりして、安定的に地域で自分の暮らしをしていただけるような入所施設の機能を具体化していきたいということで、それを形にするための勉強会などをしていらっしゃるとか、様々取り組んでいただいた。

様々な運営主体のグループホームに対して一緒にやろうとする姿勢が非常に伝わってきた。

（宝安寺社会事業部）

グループホーム側から漏れ聞こえてくるのは、例えば児童施設が入所している方々に対してもう少しグループホームに移るための準備をやってくれればいいのにというもの。一方で、児童施設の方では日々の支援でそこまではやれないという声もある。その中間的な役割の中で、半年とか1年とか、そういったトレーニングする場所として入所施設があってもいいのではと考えて提案させてもらった。

（冨田委員）

この県西地区における障害者支援の将来像で、一人一人の自らの意思に基づいて、幾つになっても安心して自分らしく暮らせる生活の場を選択できるとあるが、その本人がどこで暮らしたいかというのを選択できるのはとても大事である。

（宝安寺社会事業部）

前回委員の皆様からもアドバイスをいただいて、実際の入所施設の利用者さんを思うと、今現在の印象が一番強く、過去も少し印象が強いですが、将来というのはなかなかイメージが持ちにくいという点が課題。

（冨田委員）

将来をイメージするというのはなかなか難しい。例えば、将来どうしたいですかって言っても皆さんそれぞれ顔が曇ってしまう。それでも、自分の将来のことっていうのは、これからも考えるべきだと思う。

それから、研修など若手の育成についても大切なことだと思う。

（黒須副委員長）

入所の関係で言うと、保護者が高齢になって終の場ではないが入所するというものと、若い世代で学校を出てグループホームに入ったがうまくいかなかったというパターンとがあると思う。今回進めているグループホームとの連携とか、職員の人材育成というところは本当に大事なところ。

その中で評価入所はこれから本当に必要な取組みだと考えている。

若年層は横浜でも毎年卒業生が増えている。これは社会的な問題で、組織的に対応しなければいけない。

また、１点伺いたい。経費のところだが、人件費の部分については具体的に今年度どのようにお金を使ったのか。

（宝安寺社会事業部）
各グループホームへの連絡調整などに時間と手間がかかった。郵送から始まって、電話連絡とか、本来的な業務もあるので、既にいる職員の時間外勤務などの経費に活用させていただいた。

（内藤委員）
グループホームとの調整が非常に難しいところではないかなと思うが、一番の苦労のところを伺いたい。

（宝安寺社会事業部）
グループホームといっても相手が管理者なのか、サビ管なのか、世話人さんなのかということで、アンケートをとっても回答が異なってくるため、その整理などが大変なところ。
また、グループホーム連絡会を開くというところでも、管理者さんを中心にするとか、サビ管さんを中心にするとか、請求事務の担当を中心になど、連絡会の内容で分けながら、集めていくなどが必要になるというところ。

社会福祉法人常成福祉会（以下「常成福祉会」）から、提案事業についてプレゼンテーションを実施。

【質疑応答】
（冨田委員）
実践報告会はどういうことをするのか。

（常成福祉会）
グループホームの方々が、利用者さんを支援するときに、様々な工夫をしているかと思うので、どうやって工夫をして、支援しているのかということを他の事業所の人たちに知ってもらう機会として報告してもらうもの。

（冨田委員）
そういう実践報告会は、お互いの連携をとるという面でも重要だと思う。

（黒須副委員長）
　令和５年度は具体的にどのように補助金を活用されたのか伺いたい。人件費のところでは、新たに職員を雇用したのか。

（常成福祉会）
　大部分が人件費となっている。ニーズ調査では、調査票をウェブで回答できるようにフォーマットを試行錯誤しながら作成した。また、ネットワークづくりのために、複数の職員で原稿を持ちながらいろんな場所に何度も行かせていただいた。新たに職員を雇用したということはない。

（黒須副委員長）
　今後の展望を再度伺いたい。

（常成福祉会）
　令和５年度は、グループホームが実際に困っているところをダイレクトに把握するためにニーズ調査を実施させていただいている。
　この調査では、事業所で抱えている困難な事例を報告できる形式にしてある。
　やはり行動障害のある方の支援の難しさを感じている事業者は多いと考えている。統計上、虐待の報告の中でもグループホームで行動障害のある方が対象になってしまっているものがあるということも踏まえて、実際に現場で困っている方の事例を吸い上げ、そこに先生と我々も一緒に行って検討することで、実際に困っている事例を工夫して支援することでご本人が自身の本来の生活を取り戻したというような成功事例を作りたいと考えている。
　令和６年度はその成功事例をいろんな方に知っていただく実践報告会をしたいと考えている。
　また、令和７年度はそうした取組みを拡大していけたらと考えている。

（内藤委員）
　湘南西部圏域では５つの市町があるわけですが、それぞれの市によって微妙にその取組みとあれが違うところが多々あるかと思います。そのあたりの調整など、大変なところはどういったところか。

（常成福祉会）
　苦労という苦労まではないが、例えばその調査関係をする時に、市町によっても状況が異なり、一斉に同時にはできないということもある。ただ、趣旨としては、向かっていく方向は完全に共有しているので、それぞれの状況に応じて取り組めたらと考えている。

（在原委員長）
　令和６年度の活動予定のなかで、入所施設や精神科病院などへのヒアリングもあるが、グループホームの連携をまず作って、それとともにその病院とか、入所施設等、グループホームとをいかにつなげていけるかとか、協働できるような状況を作っていけるかというところを令和６年度はより進めたいということか。

（常成福祉会）
　おっしゃる通りです。
　施設の方からは、地域生活移行を進めなければいけないことは分かっていて、取り組んできているが、その地域のグループホームの顔が見えないということや、その支援の質のところまで把握しきれず、積極的に地域にと行動しづらいところがあるという話を伺った。
　そういったところからも、入所施設などとグループホームとが関わる場を設けたい。できれば、入所施設の方にグループホームの実践報告会に来ていただき、グループホームの支援の状況などを見ていただきながら、地域の中で顔を繋げていくということを考えている。

（在原委員長）
　そのような繋がりの中で相談はどんな立場になるのか。

（常成福祉会）
　もともと各市町のグループホーム連絡会は自立支援協議会に紐づいて存在しているため、基幹相談支援や委託相談で関わりがある。これからどうやって、これまで以上に協働していくかというところは考えていきたい。

議題３(2)　採点等

　提案法人によるプレゼンテーションと質疑応答を踏まえて、提案事業の採点等を実施。

（以上）